

映画監督・相米慎二の描いた「地方」

松井克明

要旨

本稿は、青森県三戸郡田子町にゆかりのある映画監督相米慎二の映画作品を分析し、相米監督は地方（とくに北海道、東北地方）についてどう考え、どう描いていたのかを考察する。大間町を舞台とした『魚影の群れ』（1983年）では南部藩の「抑圧された側への目線」、『光る女』（1987年）、『風花』（2001年）では北海道に希望を描き、「ユートピア的開墾地」に地方の原風景を見た。

キーワード：相米慎二、映画、田子町

1. はじめに

相米慎二（1948－2001）は薬師丸ひろ子主演の『セーラー服と機関銃』（1981年）、工藤夕貴主演の『台風クラブ』（1985年）、田畑智子主演の『お引越し』（1993年）などのヒット作を世に発表し続けた映画監督である。1948年岩手県盛岡市に生まれ、父・正にゆかりのある青森県三戸郡田子町相米と行き来しながら育ち、学生時代を北海道川上郡標茶町、札幌市で過ごしている。その半生は相米監督の数々の作品で助監督をつとめた榎戸耕史監督の証言からうかがい知ることができる。

「相米さんのお家は、青森県三戸郡田子町大字相米上相米というところなんですけど、相米さんの村には相米家が一軒しかなくて、まあ、領主みたいなかんじなんだろうなというふうに、お兄さんとか遺族の方からお話は聞きました。お父様は戦前、教育関係の

仕事で中国に行ってらっしゃったらしいんですけど、戦後引き揚げてきて、ちゃんと街に出て教育した方がいいんじゃないってことで盛岡に住んでたらしいです。相米村の方には夏休みとか、お休み中はずいぶん帰ってらっしゃってたみたいです。その後6歳の時に、釧路のちょっと奥なんですけど、湿地帯の中にある標茶（しべちゃ）っていうところに移って、そこで高校時代ぐらいまでは育ってます。その後東京出てきて、長谷川和彦さんと一緒に日活で働いて、その当時に根岸吉太郎さんとも一緒に仕事されたわけなんです。その後、日活の外に出て『青春の殺人者』っていう映画で僕は出会ったんですけども、僕がそばについていたときに、あまり喋る人ではなかったんですけども、断片的に話すことを聞いていると、そんなかんじでしたね」¹

相米監督は71年、中央大学中退後、日活の助監督として契約。79年長谷川和彦監督

¹ 座談会「生きている時から懐かしい奴」（<http://www.siff.jp/talk/2004talk/200>

2talk_soumai.html）より 2002年。



田子町にある相米慎二慰霊碑

『太陽を盗んだ男』の助監督を経て、80年『翔んだカップル』を初監督。同作品の主演・薬師丸ひろ子を再び主演に起用して、81年『セーラー服と機関銃』を監督して一世を風靡した。ワンシーン・ワンカットの長回しの手法と俳優に自分で考えさせる演技指導で、薬師丸ひろ子のほか、工藤夕貴、斉藤由貴、牧瀬里穂、田畑智子と次々と演技派へと育てた。2001年9月9日、神奈川県川崎市の病院で肺がんのため亡くなる。享年53。青森県三戸郡田子町相米の葉タバコ畑に囲まれる先祖代々の墓地に眠る。隣接した場所に慰霊碑もある。

この関係で、田子町では、「映画監督相米慎二を語りつぐ会」（会代表は山本晴美田子町長、顧問は相米琢磨氏（相米監督の令兄）と榎戸耕史（映画監督））により、毎夏、「相米慎二監督映画祭り」と「映画監督相米慎二をしのぶ会」が開催されており、地域活性化の起爆剤として期待されている。

本論文のテーマは「相米慎二と地方」である。問題意識は、相米監督作品は地方（とくに北海道、東北地方）についてどう描き、相米監督が地方についてどう考えていたのかである。ひき続き榎戸監督の発言を引用する。

「80年代の相米さんは、『翔んだカップル』

で自分の演出の方向性を見出し、『セーラー服と機関銃』『シヨンベン・ライダー』『魚影の群れ』でその手法を発展させた。そのピークは『台風クラブ』。僕が思う相米映画の第一期はここまで。第二期はその余波としての『ラブホテル』『雪の断章』『光る女』で、『東京上空いらっしやいませ』以降が第三期。87年の『光る女』の興行的な失敗によるディレカン（ディレクターズ・カンパニー）の混迷は、相米さんにとってかなりのダメージだったと思います。『映画の効率ってなんだと思う』なんてことを言い出したのはこの頃、『東京上空』の準備をしている時でした。一番しんどい状況だったんだと思います。政治的にも興味深い時代で、竹下登内閣が1988年にふるさと創生を公布し、中央と地方の問題が顕在化していた（略）原発事故が起きた今、中央と地方の問題はさらに複雑になっていますが、相米さんの映画をこの観点から読み解く人をあまり見かけません。相米さんが政治的ニュアンスを映画に織り込まないはずがないし、自分を育ててきた映画、そして土地への思いは深かったんじゃないかと思います。

第一期、第二期、第三期を経て、相米さんが次にやろうとしていたのは、新選組に入隊した南部（盛岡）藩（岩手県）の脱藩浪士の物語『壬生義士伝』（浅田次郎原作）。相米さんは『壬生』で、明治と自身のルーツである岩手県から日本を描いてみたいと思ったのではないのでしょうか。相米さんは意識してやっていたわけじゃないのに、思っていることが全部映画に出ちゃうタイプなんで

すよね」²

なお、『壬生義士伝』は浅田次郎原作で、相米監督自身も『これまでにない時代劇を目指す』と意欲的だったが、田中陽造氏の執筆した脚本第一稿の話をする事もなく亡くなってしまった。2002年、まったく別物の映画として滝田洋二郎監督作品が製作された。脚本家・榎望氏によれば、『壬生義士伝』のゲラを読んだ相米監督は、「それまでまったくみたことのなかったようなリアクションをした。乗った、これはいいぞ、というのだった。だいたい疑い深く斜めにみて、原作を手放しで褒めたことなど、ほとんど聞いたことがない」監督だったが、「俺は新撰組をやりたいわけじゃない。京都の話なんてどうでもいい。南部の話をやりたい。普通の時代劇じゃだめだ』と真剣に言っていた。東北の武士をやりたい、その空気でない」と撮れない、オープンもセットも東北に建てるとさらに無茶を本気に言った。『(美術の)小川ちゃんにとにかくいい仕事をさせたい。これは東北で撮らなきゃだめなんだ』³と気合が入っていたという。美術の小川富美夫氏は宮城県出身である。

表1 相米慎二映画作品

第一期	
1980年	『翔んだカップル』(製作:東宝/キティフィルム=配給:東宝)
1981年	『セーラー服と機関銃』(角川書店/キティフィルム=東映)
1983年	『ジョンベン・ライダー』(キティフィルム=東宝)
1983年	『魚影の群れ』(松竹=松竹)
1985年	『ラブホテル』(日活=日活)
1985年	『台風クラブ』(ディレクターズ・カンパニー=東宝/ATG)
第二期	
1985年	『雪の断章〜情熱〜』(東宝映画=東宝)
1987年	『光る女』(ヤングシネマ'85共同事業体(あ基金・富士テレビジョン・電通)/大映映画/ディレクターズ・カンパニー=東宝)
第三期	
1990年	『東京上空いらっしゃいませ』(ディレクターズ・カンパニー/バンダイ/松竹第一興業=松竹)
1993年	『お引越し』(読売テレビ放送=ヘラルド・エース/日本ヘラルド映画/アルゴビジュアル)
1994年	『夏の庭〜The Friends』(読売テレビ放送=ヘラルド・エース/日本ヘラルド映画)
1998年	『あ、春』(トラム/松竹/衛星劇場=松竹)
2001年	『風花』(ビーワイルド/テレビ朝日/TOKYO FM=Jシネカン)

² 『シネアスト 相米慎二』キネマ旬報社刊 2011年 133ページ。

³ 『シネアスト』150ページ。

相米監督は兄である琢磨氏にも、『壬生義士伝』について「南部の侍の話で、いい話なんだ」と語っていたという⁴。相米監督作品を榎戸監督の枠組みで整理すると、表1のようになる。このうち、第一期では、『魚影の群れ』は青森県大間町が舞台、『台風クラブ』はある地方都市が舞台(ロケ地は長野県佐久市)。第二期では、『雪の断章〜情熱〜』は札幌市、函館市が舞台、『光る女』は北海道から上京した男が東京を闊歩する。第三期では、『お引越し』『夏の庭〜The Friends』と関西を舞台にし、『風花』は北海道のロードムービーである。地方、とくに関係の深い北海道、東北を舞台にした作品が多いことが分かる。

相米監督としてのぎを削った根岸吉太郎監督も次のように語る。

「『光る女』が気になるね。どうしてあんな破綻した映画ができるのか。(略)相米村を眺めて以来、『魚影』もそうだけどトータルで振り返ってみると、北に向いた時に何か独特の乱れ方をしてたんだと思った」⁵

そこで、相米映画のなかで、北海道・東北がどのように描かれていたのかを第一期〜第三期に分けて整理する。その前にあまり論じられていない相米監督の釧路時代に関する証言をまとめる。2019年は相米監督の母校・釧路江南高校創立100周年であった。相米監督への顕彰の動きはないが、関係者は顕彰の動きをと動いていた。なかでも『釧路春秋』副会長の山本悦也氏は精力的に相米監督の学生時代をふりかえるべく、動い

⁴ 『映画芸術 NO. 401 総力特集 相米慎二』編集プロダクション映芸刊 401号 2002年 57ページ。

⁵ 『映画芸術』248ページ。

ていた。その経緯は『釧路春秋』2019年11月秋季号(83号)にまとめられている。次の節は相米監督の釧路市立北中学校時代の同級生であった藤田卓也藤田印刷社長の協力の下、山本氏らと釧路で行なった聞き取り調査を整理したものである。

2. 釧路(標茶町塘路)時代

まずは、相米監督の兄・相米琢磨氏の証言である⁶。

「父・正は職業軍人、満州から引き揚げてきて、慎二が盛岡で生まれた。正の兄(叔父)は田子町で収入役をやっていたこともある。父・正が終戦後、失敗の連続で長姉16歳、琢磨氏15歳、次姉11歳のとき、母・ていの実家を頼って標茶町塘路へ移った」

父・正は胃がんで53歳で亡くなり、そこから琢磨氏が大黒柱になる。

「塘路の駅前に住んでいたが家の二軒隣が旅館で、『森と湖のまつり』(1958年公開)の内田吐夢監督の撮影時にはロケ隊が宿泊していた。9、10歳だった慎二はよく遊びにいったってスタッフにかわいがられていた。同時期に撮影に来ていた『挽歌』の久我美子にはサインをもらっていた。映画については兄弟3人で語り合っていた。イタリア映画最盛期で慎二は次姉と洋画をよく見にいったようだ。小学4年生だった慎二は勉強ができない。これはあまりもひどいと札幌の美容院をやっていた長姉を頼って、札幌で勉強すればよくなるのではないかといった

ん通わせたが、ぜんぜん進歩がない。中学の途中(中2)からは釧路に戻ってきて、北中、釧路江南高校に。当時、勉強のできる学生は湖陵高校に行く時代だった。釧路江南高校では近隣の商業高校とケンカをしていた。仲間うちで逃げ足が速かったようだが、再びケンカの場所に戻ってきて殴られて、体中あざだらけだったこともある」

なんととしても大学に行きたいと中央大学の夜間部へ合格した。

「しかし、7日ただけで、7人で立てこもり、放校処分に。成田空港の三里塚闘争で左足をぶんなぐられて、それ以来左足がおかしくなった。あるとき慎二がいなくなったというので探して渋谷署に引き取りに行ったこともある」⁷

相米監督は6歳から18歳までの多感な時期の多くを標茶町の南部にある塘路で過ごす。相米監督は寡黙な性格で、本人いわく「健忘症」のために過去をほとんど話さなかったが、父親に関しては榎戸監督に話したことがある。

「相米さんが8歳の時にお父さんを亡くされたことは、少年の相米さんには世界が変わるほど衝撃的だったと言っていました。

(略)多分、相米さんの映画の中にある北の風景というのは、微妙に彼の育った環境と何か関係があるのでしょね」⁸

母親に関しては、父逝去後の小学5年の札幌への転校について監督本人が次のように語っている。

「小学5年くらいからね。オフクロが田舎

⁶ 田子町にてインタビュー(2019年3月13日)。

⁷ 学生運動については、前田道彦氏は「相米さんは71年の三里塚強制代執行阻止闘

争の学生現地闘争団キャップだった」とする証言が『映画芸術』41ページにある。

⁸ 『映画芸術』12ページ。

の人で、上の兄弟がみんな苦勞して育ったから、誰にも学問させられなかった。する余裕もなかったし。それで、俺だけ何とかしようと思ったらしいんだよね。ところが、行くなりバカなことばかりしてたから、中学2年くらいで、連れ戻されたんですよ」⁹

釧路湿原に位置する塘路はもともとは木炭の製造をしていたエリアで稲沢商店が中心にビジネスを行っており、そこに相米監督の母方の姉妹が嫁いだことから、相米監督の家族も移住してきた。父・正は稲沢商店で木炭製造、馬追いをしていた。駅の目の前に空き地があるが、かつては旅館とその奥に相米監督の家族が住んでいた住居があったという。

映画『森と湖のまつり』では往時の塘路駅前も映っており、活気に満ちた当時の雰囲気垣間見ることができる。相米監督の2歳上の吉山梢氏は次のように語る。

『森と湖のまつり』の撮影隊、宿舎がすぐ近くだったその経験が大きいのではないか。お父さんは代用教員や南部鉄瓶を売っていた。もともと母方のルーツは甲府のようでのちに長姉と慎ちゃん(相米監督)がルーツを辿りに甲府に行ったがわからなかったそう。相米監督と最後にあったのは95、96年の稲沢さんの葬儀。下駄で駆けつけすぐ帰られた記憶がある」

相米監督の親友の一人で、のちに8ミリ映画撮影に参加する魚屋さんの息子、福本文彦さんは相米監督と北中(1年生の途中から)で知り合う。当時、荒れた中学のなかで

相米監督は「都会(札幌)からきた理論派として一目置かれ、学級委員などもしていた。ケンカの仲裁などをするタイプだった」¹⁰

江南高校の教員で塘路に住んでいた石原行雄氏は「相米監督の担任は鈴木先生、数学。担任への相談で、将来的には芸術の方向に進みたいという話だったが、大学どころか高校をやっと出た」と語る¹¹。相米監督の高校時代は詰襟の学ランに下駄ばきでバンカラといった印象だが、北中時代の同級生であった藤田卓也藤田印刷社長の話では、高校時代の相米監督はトロツキーを読んでいたという。相米監督と高校時代と言え、8ミリ映画を撮影していたエピソードがある。『映画の断章』(41-42ページ)の座談会から相米監督の発言である¹²。

「高校生の頃、8ミリ映画を一本撮ったことがありますよ。そのフィルムは、ちゃんと音も入ってて、今でもどこかにあるはずだけど」「友達が生徒会の委員をやってて、『金があるから、何かやらないか』って言いだしたんですよ。それで田舎の写真屋の息子がカメラを持って、『それじゃ、退屈だから何かやろうぜ』って、一本撮った記憶がある」「劇映画なんですよ。田舎の友達に、その写真屋の息子と魚屋の息子がいて、魚屋の息子は映画とか文学とかには全然関心のない子だけど、やたら気の合う奴でね。そいつの部屋が、わりと大きかったんで、そこで準備なんかしてたんですよ。それで映画を撮って、フィルムを切ったり貼ったりして編集するのが面倒臭いから、写真屋の息

⁹ 『相米慎二 映画の断章』芳賀書店刊 1989年 44ページ。

¹⁰ 釧路市にて福本文彦さんへのインタビュー(2019年3月30日)。

¹¹ 2019年3月29日、相米監督の親戚の後藤英之氏に塘路周辺を案内いただき、子ども時代を知る関係者をご紹介いただいた。

¹² 『映画の断章』41-42ページ。

子のカメラマンに『ここを切れ、そこを切れ』って編集をやらせてたんですよ。出来上がって、すぐに魚屋の息子に見せたら、5分もしないうちに、イビキをかいて寝やがって(笑)「カメラマンをやった奴が真面目だったから、ちゃんと文化祭で上映してみたいですよ。そしたら『みんな寝てた』って(笑)」

「細かいことは全然覚えていない。何か、しつこく、しつこく撮っていたような気がするなあ。そのくせ、フィルムをさ、一回撮ったのを間違えて、もう一回使って二重に撮ったらしいんですよ。それが、写してみると、うまい具合に出ててね。『何だ、これだけ面白いなあ』とか。何となく、そんなことを言い合った気がする」

のちに「青春の殺人者」の助監督を務めた際に、8ミリで映像を撮影する機会があったが、その撮影経験が発揮されたというエピソードがある。今回、この釧路市を舞台にした若き相米監督が撮影した8ミリ映画を山本氏とともに探したのだが、見つからずであった。

榎戸監督によると「相米が撮った8ミリ映画は、長い間相米の部屋の隅にほっておかれていたようで、亡くなってから何とか復元できないかという依頼があった。しかし、かなり痛んでいて、ポジフィルムがくっついていて、剥がすと全部バラバラになってしまう状態で、どうにもならないと言われてきました。一コマずつ綺麗に剥がしていくしか方法はありませんということで、見つかってどうにもならないフィルムです！」とのことで今回は、聞き取りを行なった『釧路春秋』の山本氏の記述を引用する(155ペ

ージ)。

「相米監督は江南高校時代、親友二人と三人で8ミリ映画を製作した。親友の一人は魚屋さんの息子で、福本文彦さん。もう一人は写真屋さんの息子で加藤春雄さん。福本さんは北中学校時代からの友人。加藤さんは高校になってからの友人。『三人で釧路駅の地下歩道や出世坂、米町公園、千代の浦海岸などで、主演の女子生徒をまじえロケを行った』(加藤春雄氏談)と言う。それを編集し江南祭で、六七分の長編8ミリ映画『日々の果てに』を上映した。相米監督と同級生(一・二年生)の小川原久さんは「8ミリ映画を上映したのは覚えている。旧図書館近くの階段からバレーボールを転がしているのをカメラが追っていた。内容は覚えていない」

製作のきっかけについて相米監督は「可愛い女の子が一人いるから、それでどうだとか、その程度のことだったんじゃないですか」¹³というが、その8ミリ映画を実際に見ることができないのは実に惜しいことである。

3. 青春時代の相米監督の絵画

8ミリ映画撮影に参加していた魚屋さんの息子、福本文彦さんは相米監督ととても仲が良かった。福本さん家の曾祖母にも可愛がられ、福本さん一家は、相米監督のことを「ベカンベ」「ベカンベさん」(塘路湖でとれる菱の実のこと)とあだ名で呼んでいた。中学、高校時代、釧路駅前にあった福本さんの家に寄っては、晩御飯をご馳走になって、最終列車で相米監督は塘路に帰った。

13 『映画の断章』42ページ。

商業高校、拓殖大学と進んだ福本氏は浪人をした相米監督よりも一年先に東京に上京していたが、上京した相米監督とはマカロニウェスタンや成人映画などをこぞって見る間柄。福本さんの杉並の下宿が相米監督が学生運動のいざこざから逃避する場だったという。映画監督になってからもたびたび釧路に来た際は、福本さんの家に突然、下駄ばきでやってきて、好物のアオツブを食べながら、過ごしていたという。相米慎二が映画業界に進んでからも交流があり、ある日、突然、2つの絵画が送りつけられた。今回の聞き取り調査で初めて公になった絵画である。

ひとつの絵は背景が赤とピンクで地面が白く、一本の緑の大木が堂々と描かれている。「しんじ 47 8. 23」とある。「昭和47年8月23日」という意味か。裏には「Shinji」と書いている。年齢としては相米監督の24歳のときの作品だ。もうひとつの絵



相米監督の絵画(左)、山子さんの絵画(右)

は夜の暗い海岸を描いたような作品で「YAMAKO」とサインがあり、裏には「YAMAKO KAWAI」という署名と「一九七二年八月福本君へ」と書かれている。

この「YAMAKO」とは三里塚闘争などの学生運動で疲弊した相米監督を映画の道に誘った「山子」という女性だ。『映画芸術』

で映画監督の長谷川和彦は次のように語る。

「一九七〇年か、今村プロの助監督のとき、俺が二十四で、あいつが二十二だったのかな、二つ下だから。当時の今村プロ、幡ヶ谷の火葬場の裏の一軒屋を事務所に借りてたんだが、俺と女房は『管理人夫婦』と称してそのあばら屋に住み込んでた。(略)ある日、その我が家に帰ってみると、汚い髭モジャの男が冷蔵庫の前に座ってる。鍵かけてないから、誰でも入れたんだ。この冷蔵庫漁ってる男が相米だったんだな。『誰だ、お前は?』って言うと『山子の友だちです』とシレーツとしてやがる。山子って、よく家に来てたんだ。女房の友だちで、その頃、あいつがヒモこいてた青年座演出部のお姉ちゃんだ。あいつ、昔から、ヒモは得意だったからな。(略)その髭モジャの学生めがな、二マーッと気味悪い上目遣いで訊くんだ。『長谷川さん、映画って面白いですか?』って」¹⁴

『映画の断章』で当時のことを相米監督は次のように述懐している。

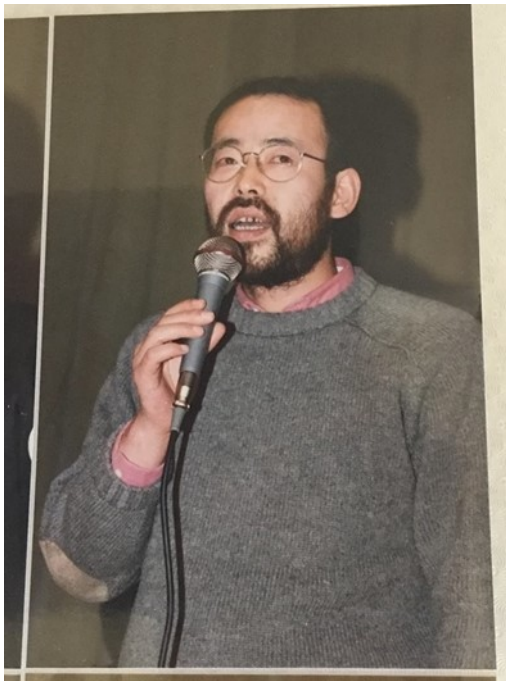
「(どうして助監督になったんですか?の質問に対し) 何かの時に話したことあるけど、その頃一緒にいた女の子のヒモをしていて……金持ちの女じゃないから、女の子も仕事しなけりゃいけないっていうんで、丹治睦夫さんっていう、その頃まだ社名は日活だったんだけど、わりと優秀な編集マンがいたんですよ。その助手に、その女の子がついたんだけど、俺はそんなこと自分がやると思ってなかったから、バカなことやるもんだなと思って見ていたんですよ。半年くらいその子はやってたのかな。で、『あんたも働かなけりゃダメでしょ』って言い始めたんですよ。俺は面倒臭いから、逃げる

¹⁴ 『映画芸術』22 ページ。

気でいたんだけど、まあ、何もしてないわけだし、退屈だから(略)その人が撮影所に入れるように頼んでくれたのね。女の子が頼んでくれたんじゃないですか」¹⁵

絵画が送られた昭和47年(1972年)、時代的には助監督時代の相米監督が恋人である「山子」と描いたものようだ。鮮やかな赤を基調にした監督と、落ち着いた青を基調にした「山子」さんの絵。二人の青春の心情が感じられる作品ではないだろうか。

その後も福本さんと相米監督の交流は続き、福本さんの結婚式(1982年)に相米監督は出席している。友人代表で挨拶するにもかかわらず普段着なのが監督らしい。



この絵について、中学時代からの旧友である藤田卓也氏は「70年安保闘争に敗れた後の当時の重苦しい雰囲気が伝わる10号ほどの油絵小品」と語っている。

4. 大間と相米慎二(第一期) 『魚影の群れ』をめぐる

相米映画のなかで、北海道・東北がどのように描かれていたのかを第一期～第三期に分けて整理する。

「このマグロは一筋縄ではいかねえんだ。北海道の釣り船やソ連の延縄船団なんかの仕掛けをくぐり抜けてきたしぶといヤツばかりなんだ。だからとれたら本当に大したものだぞ」

娘の登喜子(夏目雅子)にこう熱く語るのはマグロー一本釣りのベテラン漁師・房次郎(緒形拳)。青森県大間町を舞台に、漁師の世代交代をテーマにした映画『魚影の群れ』(1983年)のワンシーンだ。

黒いダイヤと呼ばれるクロマグロ(通称:本マグロ)。1匹1億5540万円(2013年)といった値段で取り引きされ、高値で争われるマグロの初競りは年始の風物詩になっている。その主役が青森県大間町である。本州最北端にある大間町が面する津軽海峡は、黒潮、対馬海流、千島海流の3つの海流が流れ込むため、良質のプランクトンが生息。イカ、サバを主食するマグロは水温が低くなる秋から冬にかけて上質な脂がのる。出荷される30kg以上のマグロは地域団体登録商標となった「大間まぐろ」というブランドネームで市場に出回ることになる。『魚影の群れ』は吉村昭の同名小説を原作にしたもので、ベテラン漁師・房次郎(緒形拳)と、娘の恋人の青年・俊一(佐藤浩市)という俳優たちに危険なマグロ漁を行わせたその緊迫感は圧巻である。ただ、83年段階では、

¹⁵ 『映画の断章』44ページ。

ブランド化前であり大間と言えばマグロどころか、マグロ漁についても前提知識がなかった。『映画の断章』によれば、もともとの企画は織田明プロデューサーによるもので、相米監督が呼ばれたときには脚本ができていて、「これを今度やれって言われたんだよ」「マグロなんて俺は知らねえよ」と榎戸監督に語っていたという¹⁶。

しかし、榎戸監督によれば、最終的にはカットされたものの、次のようなシーンが撮影されていたという。

『魚影の群れ』に出てくる刑事役は寺田農さんが演じている。そのセリフは最初のテープは南部弁で送っていたが、相米さんは『南部弁ではなく津軽弁で』と直したために寺田さんに勉強しなおしてもらった。聞いてみたら、南部弁と津軽弁はまったく違うんです。歴史的経緯も、南部は幕府側で、津軽は明治政府側。刑事は官憲。その頃はまだ幕末の体制がそのまま残っていて、中間管理職はみな津軽だろうと。相米さんは政治的には動かなかったけど、東北は中央政府に利用されてきている。そういう背景を映画の中に埋め込まざるをえなかったのではないか¹⁷

南部藩をめぐる『壬生義士伝』への意欲ぶりをみても、相米監督は青森を題材とする際には、「抑圧された側への視線」を欠かさないようである。

なお、その後、大間はドラマ、NHK 朝の連続テレビ小説『私の青空』のロケ地としても注目されるが、この主役はのちの相米監督

の『お引越し』の主役でもある田畑智子であり、田畑はこのNHKの主役が決まった際に、赤坂で相米監督とすっぽん料理を食べたという¹⁸。むつ市のロケ地のすぐ近くには徳玄寺がある。むつ市の鬼才の映画監督・川島雄三(1918-1963)の墓がある。川島雄三は音にこだわる映画監督であり、相米監督は川島作品との関係もある音声スタッフにその類似性を指摘されたこともあったという。

5. 北海道と相米慎二(第二期) 『雪の断章～情熱～』『光る女』をめぐって

プロデューサーの伊地智啓(2015)によれば、北海道当別町出身の佐々木丸美原作の『雪の断章』(1985年)はもともとは薬師丸の『翔んだカップル』の次に『セーラー服と機関銃』とあわせて伊地智啓によって用意されていた作品。その後、 blanks はあったが、斉藤由貴をお正月映画でデビューさせるという東宝の狙いと合致し、メガホンをとるのは相米監督となった¹⁹。札幌市と函館市をロケ地とした。青森県の詩人寺山修司が主宰した「天井桟敷」が登場するシーンもある。相米監督は寺山修司の映画監督作品『草迷宮』(1983)の助監督も務めている。『雪の断章』は相米監督が「斉藤由貴の正月映画だぜ。由貴が良きやいいんだから」と語るアイドルが主人公の青春映画であった²⁰。

『光る女』(1987)に関しては、伊地智啓(2015)によれば、北海道滝上町出身の小檜山博の原作『光る女』はもともとはディレ

インスクリプト 226 ページ。

²⁰ 『月刊シナリオ』1987年11月号「監督インタビュー／「光る女」をめぐって 118 ページ。

¹⁶ 『映画の断章』112 ページ。

¹⁷ 神奈川県横浜市にて榎戸耕史監督へのインタビュー(2018年11月3日)。

¹⁸ 『シネアスト』109 ページ。

¹⁹ 伊地智啓(2015)『映画の荒野を走れ』

クターズカンパニーの企画であり、相米監督の発案ではなかった。相米監督も東京国際映画祭の賞金で期限付きで映画を撮らなくてはならないという制約もあり、伊地智プロデューサーのキャスティングも「片っ端から上手いかない」「あんなトライアル、もうどこ探したってやれる場所なんか無い」作品とされる²¹。しかし野心的な作品に再評価の声も高い。根岸吉太郎監督も次のように語る。

「最近はずっと観てないけど、『光る女』が気になるね。どうしてあんな破綻した映画ができるのか。(略) 相米村を眺めて以来、『魚影』もそうだけどトータルで振り返ってみると、北に向いた時に何か独特の乱れ方をしてたんだなと思った」²²

北海道滝ノ上の山奥から東京へ行ったまま戻らない許嫁の桜栗子(安田成美)を捜すため、大男・松波仙作(プロレスラーの武藤敬司)が上京。初めての東京で途方に暮れる仙作はゴミの山の上で歌を歌うクラブの歌姫(秋吉満ちる)と恋に落ちる異色のラブ・ファンタジー。熊皮チョッキに乗馬ズボン、顔中ひげだらけのうえに裸足の大男が都会を闊歩する。『キング・コング』(1933)なのだという²³。

榎戸監督は「仙作は、夢の島に上陸し、銀座を歩き、オープンカーで都会を享受します。東京に出てきた大男・仙作は、相米さんにとっての“キング・コング”だったのではないかと思います。とてつもない大男が腐敗した都会に出てきて、『嫁さんを探しに来

た』という。『榎戸、映画だろ？これ映画だろ？』と本を読みながら、相米さんが言っていたのを思い出します」²⁴とする。

地方から出てきた仙作は都会の代表として立ちふさがるクラブ・ジョコンダのオーナー尻内(すまけい)と戦うことになる。

「地方と都市の拮抗というイデオロギ的なものまで入っている。尻内——すまけいさんが演ったあの人物は多分、相米さん(もしくは投影)なのではないか。都市の中で腐乱していく男という……。それと、相米さんにとっての歴史問題もあったと思います。尻内は後醍醐天皇なんだとか、僕らからするとエツと思うようなことを言ったり(笑)、社会学の本や中世の絵巻物などをずいぶん読んでいましたし……。だから相米さんのアイデアがかなり入っていました」²⁵と榎戸監督は解説する。

また、インタビューで榎戸監督は次のようなエピソードを紹介している。

「東京の在り方が、地方の人間たちの集合体であるという認識が相米さんのなかにあったのではないか」「『光る女』で、尻内という男がイタリア語で戦いながら詩を歌うシーンがあります。あれは北海道小樽市出身の詩人・小熊秀雄(1901-1940)の詩『馬の糞茸』なんです。小熊秀雄の詩は『なつかしい馬の糞茸よ／僕は都会にきて／心がなまくらになつたよ／靴をみがくことと／コオヒイをのむことを覚えたきり／なんの取柄もない人間となつた』²⁶小熊秀雄も北海道から出てきて、池袋モンパルナスの文化

²¹ 伊地智啓(2015) 236 ページ。

²² 『映画芸術』248 ページ。

²³ 『映画芸術』17 ページ。

²⁴ 『シネアスト』133 ページ。

²⁵ 『映画芸術』17 ページ。

²⁶ 『小熊秀雄全集 09 遺稿詩集 (8)』「流民詩集 1」青空文庫より。

人となりますが、その詩を相米さんもオペラの人だからイタリア語がいいというのでイタリア語に翻訳して、地方から出てきた人間が都会で墮落していく叫びのように描いている」

原作にはないが、映画の中で赤沼（出門英）は根室の漁師の出身で逃げた女房を探しに上京したが、厚化粧の踊り子に身をやつし、ホームレスのような生活に落ちていく様を描いている。

また、「尻内」という名前も象徴的である。原作にはない「尻内」という登場人物だが、かつて、1971年まで現在の東北新幹線の停車駅である「八戸」駅は、その地名から「尻内」駅という名称だった。田子町からほど近い当時の東北本線の「尻内」駅と同じ名前が、東京のクラブ・ジョコンダのオーナー役に使われるのも示唆的である。

さて、本題の北海道の描かれようである。東京が地方の人間の集合体だとすれば、北海道はどうか。原作では、仙作は光る女を北海道滝ノ上の山奥につれて帰る生命と大地への賛歌で終わっている。「女を連れて帰ることが希望」（相米監督）となる物語となっている。映画では、「ユートピア的開墾地」²⁷のようなハッピーエンドで終わっている。この終わり方をめぐって二転三転したそうだが、脚本の田中陽造氏との間で興味深い見解の相違があったという。相米監督は次のように語っている。

「陽造さんのホンのラストは、映画と違って原作に近いんだけど、陽造さんも僕も原作ほどは……。小檜山さんだって現実に生きてるんだから、そんなに希望がある

とは思っていないだろうけども、陽造さん自身はもっとない人だったな。(略)だから、俺は陽造さんよりもっと恥ずかしくしてしまおうと思ったの。だって、ああいう馬鹿な画（え）、皆んな撮らなくなったじゃない、どこの映画も」「陽造さんが言うには、要は東京にも希望なんかないけど、北海道にだって希望なんかないんだって。この映画はね、地上一寸五分を歩いている人間たちの話なんだって。シナリオ書いた人が、そう言うんだからね」²⁸

浮遊している人たちを描いた作品として田中氏は描き、相米監督は「俺はだけど、居ないと思って撮ってないからね。映画撮ってんだからさ。陽造さんは文字だからいいけど、俺はやっぱり肉体を相手にしてるわけだから」と語るのである。

83年に原作は第11回泉鏡花文学賞を受賞した作品である。その直後に経済的にはバブルの時代を迎え、ますます東京一極集中が進んでゆく。その過程で地方にどのような希望を見出すのか。

「80年代の北海道も10年で一気に都市化して、とくに札幌市は地方都市としては描きにくい時代になっていた」（札幌市を拠点に活動し相米監督とも交流のあった亜璃西社・和田由美氏）だけに、都市対地方という構図のなかで描きにくい時代が80年代だった。

また、女性を故郷に連れて帰るという『光る女』のテーマはそれまでの女性の躍動をテーマにした相米作品のなかでも毛色の違ったものであった。

映画評論家が「ユートピア的開墾地」と

²⁷ 塩田時敏（1987）『『光る女』映画評論』『月刊シナリオ』1987年11月号 127ページ

ージ。
²⁸ 『月刊シナリオ』121-122ページ。

した世界は、相米監督の原風景なのか、その後、北海道のロードムービー『風花』（2001年）のなかで別の形で現れる。

これを脚本家・荒井晴彦は「確かに共同体みたいなものが出てくると説明もなしにそこへガンと行くというか、それをベースに世界を作っていく。例えば『光る女』の最後、ユートピアみたいなものが出てくる。最近でも『あ、春』の病院の屋上とか『風花』のペンションとか、必ず変な人達が出てくる」²⁹と指摘する。

6. 北海道と相米慎二(第三期) 『風花』をめぐって

『風花』（2001年）は佐賀県出身の「女運の悪い」男（浅野忠信氏）と北海道出身の「男運の悪い」女（小泉今日子氏）が北海道（ロケ地は佐呂間町、上川町、大雪山系の愛山溪温泉など）を舞台に繰り広げるロードムービーであり、相米監督の遺作だ。女優「小泉今日子」としての注目を浴びるようになった作品であり、「過去をもう全部捨てて、これからの私のデビュー作みたいな、そんな気分さえする」と小泉今日子本人がDVD 付録のメイキングで語っているほどである。

脚本（森らいみ名義）の榎望氏によれば、『風花』は相米監督の発案だった。鳴海章氏の原作を「ざっと読んだだけだけど、ちっちゃこい映画ができるんじゃないか」と脚色を依頼されたのだという³⁰。

「雪のあるところをみたい」「私も田舎に帰

りたい」と挫折したエリート官僚と風俗嬢が「こんな地の果て」である北海道で再生をする物語の中で、主人公である挫折したエリート官僚は疲弊する北海道を車でめぐりながら毒づく。

「なんでこんなまでして生きなきゃなんないだろうね」「帰るところあればこんなところにいないよ」

北海道を毒づくというよりもまるでエリート官僚に見えているのは地方ではなく東京そのものである。

また、悪酔いの末、開拓 120 年の幌辺町という架空の町の居酒屋で「120 年かかって、なに残したってんだよ」とあざけるように笑い、現地の酔っ払いに暴行を受けるというシーンもある。ご都合主義的な政策に左右される北海道の悲哀を、エリート官僚役の浅野氏がなじる叫びのように聞こえるシーンである。

道に迷った末にたどりついたペンションで柄本明と宿泊者らが猥歌を「びよびよ」と歌うシーンもあり共同体を意識させる。再生へのクライマックスへの重要な部分である、舞う風花に踊る小泉今日子は光りを放ち、まるで『光る女』の原作のクライマックスシーンを彷彿とさせる。

なお、浅野忠信氏によると、撮影現場で相米監督は「輓馬が大好きだったみたいで、撮影中もそのことばかり気にしていました」³¹という。相米監督は「北海道を元気にする映画を作りたい。特に男が元気になるような映画を」と『風花』と同様に鳴海章原作の

²⁹ 『映画芸術』248 ページ。

³⁰ 『シネアスト』149 ページ。

³¹ 北の映像ミュージアムウェブサイト 201

2年10月29日付『浅野忠信ナイト』レポート!」(<http://kitanoheizou.net/blog/?cat=55>)

『轆馬』の構想があったことから³²そのことが念頭にあったのではないか。『風花』は『光る女』同様に、相米監督にとって北海道は希望であり、再生につながっていることは見えてくる。

7. あきた十文字映画祭と相米慎二

「あきた十文字映画祭が映画教室をやるといので、シナリオ指導で十文字町に来ていた。映画祭は2月なので、夏の秋田は初めてだった。雪の無い秋田はなんかスカスカしている気がした。雪が無けりゃ何も無いとでも言ったのだろうか、映画祭の吉村美貴子に、相米慎二監督が三日間観た西馬音内盆踊りというのがあるんですよ、見ますかと言われた。毎年8月16、17、18日に開催される盆踊りの2日前に、NHKの盆踊りの特集で観た相米に言われて田辺マネージャーが宿の手配で電話してきたという。2日前では宿はある筈も無く、吉村が奔走して、2晩は確保したが1晩は吉村の家に泊めたという。相米は『来年は俺も踊ろうかな……』と言い残して帰ったそうだが、その来年、2001年、相米は、2月の映画祭（露天風呂で降りかかる雪が相米の頭で溶けていた）のあと、入院、9・11の二日前に死んでしまう」

これは、秋田を舞台にした映画『火口のふたり』（2019年）を撮影した荒井晴彦氏の製作に至ったきっかけについてのコメントの一部である³³。

編み笠や彦三頭巾で顔を隠した踊り上手たちのあでやかな端縫いや藍染めの衣装が

篝火に浮かび上がる。西馬音内盆踊りは、1981年には高い芸術性を有する文化として国の重要無形民俗文化財に指定されたものだ。

当時の相米監督について映画祭実行委員会の事務局・吉村美貴子氏にメールでのインタビューを行った。まずは映画祭について。

「当映画祭は、1991年末から1992年正月の開催を初回として毎冬開催し今年2月に第29回目を終えましたが、近くて遠い存在だったアジアの国々について映画を通じて理解しようと、中国や韓国、イラン、ベトナム、台湾などの秀作を上映する他、日本映画を応援する意味で、県内では中々目にする機会が少ないミニシアター系の作品を主に、将来を担う新鋭監督作品と、邦画新作・話題作上映の3つをコンセプトとして継続してきました。相米監督には1999年1月15日～1月17日開催の第8回と2001年2月10日～2月12日開催の第10回にゲストとして御招待し御来場いただきました。

もともと、この映画祭はその映画祭初回の10年ほど前から、十文字町役場職員を中心としたメンバーのサークル活動で自主上映会を継続しており、地方創生で交付された1億円の一部を活用し、『映画館のない街で、映画による町おこしを』と、メンバーを中心に地元有志が始めた、観客が身近に交流できるアットホームな雰囲気イベントです。俳優の永島敏行さんと大学時代からの親友が実行委員の中にいたため、映画祭立ち上げ当初から永島さんには御協力いただいております。初回に上映した永島さん主演

³² 『シネアスト』216ページ。

³³ 映画ナタリー (<https://natalie.mu/eig>

[a/news/312452](https://natalie.mu/eig/a/news/312452)) 2018年。

作『遠雷』に関わりゲストで来場したスクリーンプターの白鳥あかねさん、脚本家の荒井晴彦さんと、第2回から関わった映画活動家の寺脇研さんには顧問としてサポートいただきながら、映画祭の企画、運営を継続してきました。

私は、映画祭以前の上映会の折に何度かと、映画祭初回時に受付を頼まれて参加したことをきっかけに引き続き参加し、途中からは事務局となり実行委員の一人として現在まで関わっています。現在はほぼ実行委員だけでプログラムを企画し、配給や芸能事務所への交渉は作品ごとに担当を分けて対応していますが、最初の頃は顧問に相談しながら進めており、第8回の相米監督への参加依頼も白鳥さんを通じてお願いしました。前年1998年に公開された『あ、春』と、東北を舞台にした『魚影の群れ』とともに、監督の要望で、過去に相米作品で助監督を務めた弟子たちのデビュー作で3話オムニバス映画『ポッキー坂恋物語 かわいいひと』も上映することになり、相米監督と2作品主演の佐藤浩市さん、『かわいいひと』監督の村本天志さん、富樫森さん、前田哲さんらをゲストにお迎えしました。

実行委員は映画祭運営に関しては全くの素人ばかりでしたが、観客として県内外の他映画祭メンバーが訪れることもあり、次第にネットワークも広がっていきましたが、映画祭を継続していくに当たり、県外の映画祭に足を運んで運営の方法を学ぶ事もありました。

当映画祭3回目の2月にゲストで参加した脚本家の斎藤博さんが、同年4月に急逝され、その特集上映を8月の湯布院映画祭でやることになったので、興味が湧き、私は

湯布院の実行委員として全日参加してきました。この折に相米監督に初めてお会いでき、十文字のことを一生懸命紹介してきました。田舎の小さな町で、会場も古く、布スクリーンでの上映等ベストな環境でない中での開催ですが、ぜひ十文字にもお出てくださいとお願いしてきました。盛岡出身の監督は『岩手も秋田も同じじゃねえか』と言葉少なに答えてくれ、そんなに卑下することはないと思われました。

その5年後に8回目を開催するに当たり、私だけが面識があったため、相米作品担当となり再び監督と関わることになりました。

8回目の翌年である2000年夏、相米監督は西馬音内にやってきました」

その場でもやはり口数は少なかった。

「口数の少ない方でしたし、特に秋田の祭り等についての話もしていなかったと思います。同年の盆踊り寸前にNHKテレビの盆踊り特集番組を見た監督が、急遽秋田に行きたいと言いだし、宿の手配で困っていた田辺順子マネージャーが、西馬音内がある羽後町が十文字の隣町だったため、宿の情報を求めて連絡をよこしました。私の自宅から盆踊り会場までは車で15分弱、また母の実家も西馬音内で私自身も小さい頃からなじみのあるものだったので、何とかしたいと思い宿の手配をすることになりました。

盆踊りは例年8月16日から8月18日の3日間開催されます。監督は、3日間とも鑑賞したいと希望し、栈敷席、お囃子の櫓、櫓の下と日毎にそれぞれ別の場所から鑑賞し満足して帰られました。『来年は俺も踊ろうかな』と言い残したのはそのときです。監督の作品には『火・炎』が象徴的に登場する場面があると思いますが、この盆踊りもかが

り火の周りに輪を作って踊ります。直接は話していませんでしたが、多分作品制作の参考のために見ておきたかったのだらうと思います。

3日間、日中は地元のあちこちを何でもないことをおしゃべりしながら私の運転でドライブロケハンし、夜は盆踊り鑑賞につき合い、私にとっては特別な時間となりました。2日目の宿が取れず、仕方なくわが家にお泊りいただき、盆に里帰りした叔父さん状態で私の家族とも楽しく過ごしていきました。父がテレビで時代劇を好んで見ていることを話した覚えがありますが、監督が次回作に『壬生義士伝』の映画化を進めていたことを後から知り、その主人公の名が吉村だったので、縁を感じると共に本当に寂しく残念に思いました」

「そして、2001年2月の10回には遺作となった『風花』のゲストで来場し、この年の9月に亡くなられました。私は映画祭を代表して葬儀にも参列し、同年秋には、監督への感謝も込めて映画祭とは別に『相米慎二追悼上映会』も開催しました」

この踊りに魅了されたという相米監督は何を思ったのだろうか。

8. おわりに

相米監督が亡くなって2021年で没後20年となる。田子町では、「映画監督相米慎二を語りつぐ会」による、「相米慎二監督映画祭り」と「映画監督相米慎二をしのぶ会」が開催されており、今後も映画が地域活性化の起爆剤としてどのように機能するかを検討していきたい。